

それは明治三十五年十月、彌之助が歐米を巡遊しての歸途の事であつた。船がシンガポールに到着した時、同船の邦人の一人が悪疫に犯されたのである。病氣は傳染性のものであつたので乗込んだ内外人も恐怖し、今まで交際してゐたものも遠ざかつたのであつたが、彌之助のみは接近して此の男を懇初に看護さへした。同行の小川鮎吉は（郵船重役）彌之助の爲に之を案じて、傳染の場合を切言して立寄りぬこを諫止したのであつた。然るに彌之助は、同胞の憐むのを傍観するこは出来ない云つて小川の勸告を拒否した。「自分は注意してゐるので容易く傳染するこは思へないが、若し傳染したこしても私には放任して置くこが出来ない」と斷言し、一層其の病者を看護したのであつた。此の彌之助の高潔な心事は全船客の良心を刺戟せずには居られなかつた。人々は彌之助の純情に打たれ、感激して此の病人の看護に盡力したのである。

彌之助の性格の中にはかうした人間味の横溢があつた。こゝに企まざる彼の人氣の淵源を求めるところが出来るのである。此の善謀純情の高士が、決然として憤起した時、全社員が擧げてその生命を共に此の一戦に投棄しようこ團結したのも亦當然であつた。

四

應戦の勝を決めた三菱は彌之助の指揮の下に一致して勁敵を粉碎せんこ立ち上つた。勢ひ其の

船客爭奪戦は以前に倍するほどの猛烈さを示した。

横濱神戸間の三等船客運賃が五十五錢まで競り下げられた事は既述したが、今度はそれを僅かに二十五錢に引き下げ、其上に船には一々三十錢位の手土産を持たせて歸すようになった。これでは勿論採算のされる筈もなく、たゞ其資力を以て敵を壓伏しようこ計つたのである。此の徹底的な行動を見た敵手は、品川も共同運輸も共に三菱の頑強さに舌をまいて驚いた。執拗云はるか頑強云はるか、三菱の抵抗振りには捨身の鋭さが溢れてゐた。此の異常な死を賭した逆撃に品川彌次郎は一種の戦慄を覺へずには居られなかつた。然し、弱味を見せてはならぬ云ふので共同運輸も之に對應して容易に屈しようこはしなかつた。既に舊債を返済し、社員の減俸を斷行して堂々の陣を布いた三菱であるが、一日は一日を重ねる毎に斃死の淵に突入するにも等しかつたのである。事實あこ一年も戦を繼續すれば、三菱會社は完全に破産の運命に陥らねばならなかつた。彌之助は靜かに敵手共同運輸の實狀を凝視し、彼も又命且夕に迫れるを察して、こゝに乾坤一擲の秘策をめぐらすに至つたのである。荏苒日を曠うすれば味方の士氣は沮喪し、三菱會社は遂に根底から崩壞の悲運に當面せねばならなかつた。徒らに坐して潰敗せんよりは寧ろ深く自滅するに如かずこの決意を抱いた彼は、最高幹部の二三人こ協議の結果、各地から會社所有の汽

船帆船を召集して品川沖に碇泊せしめ、命令一下直ちに之を一炬に附して自滅するの氣勢を示した。彌之助の腦裡には品川彌次郎及び共同運輸の目的が、三菱の完敗に依る全財産の掌握にあることが見抜かれてゐたのである。されば「屈服の時刻れば深く自滅して其の最後を飾らん」と云へば、彼等は狸の皮算用に等しき失望を感じずには居られないことが判つてゐた。既に年賦償還金も完済した上は、三菱會社は其の全財産を如何に自由處分するも何人の容喙もあるべき筈はないのである。彌之助は一つは敵の牽制策として、一つは味方の士氣を振興せしめる手段として此の捨て身の戦法を揚言したのであつた。然し彼の心中に於ては、萬一かゝる場合に遭遇した時には、悲壯にも實際に此の計畫を實行して、其最後をを潔くしようとして定めてゐたのである。

品川は此の彌之助の最後手段を聞いて驚愕せずには居られなかつた。彼は自分の三菱攻撃政策が既に非難の聲に包まれてゐることを知つてゐた。恐らく彌之助の揚言は、一種の恫喝政策に過ぎないことは考へてみたもの、萬一實行に移された場合を思ふに戦慄を禁じ得なかつた。三菱が其所有船舶を一炬に附したとすれば、日本の航海權は忽ちの中に外國會社の爲に奪はれるのみか國家の一大損失として此の直接責任者は重大な制裁を甘受しなければならぬ。品川は三菱攻撃の主謀者としての自分を省みる事を餘儀なくされたのである。三菱自爆の日には即ち彼自身の政治

上の地位の顛没する日である。ことを知つた。彼は慄然として農商務卿西郷從道の門を叩かねばならなかつた。彌之助の最後手段は見事に敵將の心臓を貫いたのである。

品川から事情を聴取した西郷は遂に此難局を收拾せんことを決意を定めた。彼は既述の如く品川の愚學に少からず不快を抱いてゐたのである。時は來た。排難釋紛の決意の下に、彼は國家的立場から此の紛争解決に乗り出したのであつた。先づ難局打開の人物として農商務少輔森岡昌純及び同書記官加藤正義の兩人を選んだ。西郷は先づ此の兩名を在官の儘、非職として共同運輸に入社せしめ嚴密に其内容を調査させたのである。同時に伊藤雋吉、遠武秀行の正副社長は辭職して海軍に歸つた。こゝに於て品川は完全に其の宿望を擲たざるを得なかつたのである。事實上の農商務卿として河野敏謙以來西郷に至る間、井上の威權を背景に省内に扼據し、三菱攻撃の暴學を指導した彼も、今や全く三菱の反撃の前に畏怖し、屈服するに至つたのである。彼は森岡、加藤の爲す所に一言の干渉をも試みる事が出来なかつた。それは痛快なる惡業の制裁と云はねばならない。森岡と加藤は嚴密なる調査の結果、共同運輸の損失が一ヶ年百萬圓以上にも上つてゐることを發見し、「此上は政府の干渉に依つて兩社に合併の内訓を下すの外なし」と云ふ意見書を西郷に提出した。同時に密使を以て岩崎彌之助の來訪を求めたのである。彌之助は快然として此の要求に

應じ、單身森岡の邸に赴いたのであつた。森岡邸には加藤も居て慰勉に彌之助を迎へた。それは明治十八年七月の或る夜の事で、事實上三菱對共同運輸の停戦談が整つた日云ふ事が出来る。彼等三人はお互に胸中を打ち開け、舊知の如く歡談を交へた。お互に競争の愚を語り、色々な怪ましい事實を物語つて、腹藏なくお互の心をさらけ出したのである。

森岡が「三菱はあまごの位持久出来るか」を問へば、彌之助は「高々一年は持ちませうか」を答へる始末。森岡はそれに應じて「共同運輸は漸く百日を支へ得るのみだ」を答へて、其の大膽中を示す云ふ具合で、全く聊かの縣引も双方にはなかつた。白柳氏は其夜の歡談の一節を左の如く述べてゐるが、彌之助の高潔なる心事が瞥へて面白い。

「成るほご一ケ年と百日では三菱が勝です。併し、さうして三菱が買つた處で、今日の三菱の創痕は到底致命傷です。外國船が乗込んで來れば直に止めを刺されてしまひます。それは政府が勝つた場合も同じごにはありませんか。之を要するに、三菱が勝つても、共同が勝つても、日本の航海業はモウ外國の餌食になつてしまふより外にありませんよ。」

彌之助は沈痛な調子で云つた。

「成る程な。今こそ競争の最中故、外國船も這入つては來ぬやうなもの、何方か勝つて、何

方か、倒れたましたら、直に外國船が侵入して來るでせうな。」

「勿論で！」

「岩崎さん！ コリヤお互に國の爲ごいふごも考へて見なければなりません。ご云つて以前の協定のやうなものでは所詮駄目です。斷然競争をやめてイツソ合同をしてしまひますかな。」

「合同！ それなら大賛成です。」

「賛成してくれますか。それは有難い。私達兩人はモウ疾からその意見です」

「三菱のごは、何事でも私一人で取まごめられますが、御社の方では何うでせう。他に重役も株主もある事故、却々困難ではありませんか」を。 (此の會話、白柳氏岩崎彌太郎傳より)

敵に内情を暴け出した森岡の誠意も讀むべきであるが、必勝の優位を持って潔く國家の爲に合同を望んだ彌之助の赤誠は、彌太郎長逝の虚に乗じて協定を蹂躪した彼の品川一派の背徳醜弄の心事を對比して、正に雲泥の相違を認めずには居られないのである。此夜の三者の歡談は愚かしき三ケ年の愚闘を拂拭せしめる重大なる基礎工事であつた。森岡は此の會談に依つて合併の膳立を整へたのであるが、農商務省は改めて七月下旬に、兩社に對し競争の慘害を説き、合同の國家的利益を説いた内訓を發して、其の答申を促したのである。

三菱は八月一日に答申書を以て「公平ノ御趣旨ヲ以テ兩社合併ノ廟議御決定相成候上ハ、假令三菱ノ旗號ハ倒レ、内外人ニ對スル名譽上實ニ忍ブベカラザルノ事情有之モ、國家ノ大計ト公議ノ如何ニヨリテハ、勉メテ政府ノ御趣旨ニ副フ、云々」云々云々悲壯なる答申をしたのである。抗爭は實質的に於て三菱の勝利に歸したは云へ、明治三年十月九日に於ける土佐開成商社の創立以來滿十五ヶ年の日子を、全靈を傾けて築き上げた彌太郎及び其の一黨の勞苦を思ふ時、此に其の發祥の地たる海運業を閉止するに至つた彼等の胸中を推測して、感無量たらざるを得ないのである。一方共同運輸側に於ては、一部の株主重役中に強硬に合同反對を主張したのもあつたが政府側の説得に服して遂に合同を承認するに至つた。彼等は百日の維持も困難であるにも拘らず全くヒステリー女の如く喚いて、極度に感情に走つたのであつた。然し共同運輸の合同案は八月十五日の同社員臨時總會に提出され、千二百七十三票に對する三千三百六十九票の多數を以て通過したのである。

かくして新會社の創立委員として共同運輸側からは、小室信夫、堀基の兩名、三菱側からは岡本健三郎、莊田平五郎の兩名が撰ばれ、互に相會して合同を協議するに至つた。

彌之助は三ヶ年に渉る激烈なる爭鬪の解消を目前にして、社中一般に次の如き布達を發したのである。

「先般共同運輸會社創立以來ハ、本邦船舶ノ數一時俄カニ増加シ、運輸物産トノ權衡ヲ失ヒ、營業上遂ニ競争ヲ引キ起シ、其困難名狀スベカラズ、然レドモ彌之助ハ諸君ト共ニ、粉骨碎身、精神ノアラン限り、資力ノ繼カン限りハ耐忍シテ、時運循環、素志ヲ達スルノ時機ヲ相待チ居リシ處、政府ニ於テハ、本邦海運現今ノ困難ヲ傍觀シテ、優勝劣敗、自然ノ數ニ放任スベカラズ、而シテ其競争ヲ止メ、將ニ瓦解ニ至ラントスルノ勢ヲ挽回シカチ一ニシテ外船ノ侵入ヲ防グハ、三菱、共同ノ二社ヲ合一ニシテ、更ラニ汽船會社ヲ組織スルノ外、他ニ爲スベキノ道無之トノ御趣意ニ有之、到底彌之助等他日時機ノ來ルヲ待ツテ、從來ノ宿志ヲ達セントノ私情ヲ以テ此ノ政府公議ニ悖リ居候テハ、其レガ爲メ終ニ我が國海運ノ全體ヲシテ瓦解セシムルノ不幸ニ陥リ可申、果シテ然ラバ、前社長ガ多年刻苦シテ諸君ト共ニ國ニ盡サント欲セシ處ノ精神モ、終ニ水泡ニ歸スルノミナラズ國家ノ不幸實ニ之ヨリ大ナルハナシ、是ニ由リテ此ノ際斷然私情ヲ捨テ公議ニ服從スルノ外他ニ致方モ有之間敷ト存ジ、其筋へ御受書モ指出シ置候。就テハ新會社創立ノ日モ亦近キニコレアルベク候間、諸君ニ於テモ斷然私情ヲ去リテ公議ニ基キ單ニ國家ノ爲メニ益々盡力シテ、不撓不屈、是迄三菱會社ニ熱心セラレシ處ノ精神、經驗ヲ移シテ新會社ニ從事シ、此事業

ヲシテ益々隆盛ノ域ニ進マシメ候事ニ決心致度、此段心得ノ爲メ申述候也。

明治十八年九月十五日

三菱會社長 岩崎彌之助

彌之助の胸中を貫くものはたゞ報國の赤誠に外ならなかつた。彼は私情を捨て、公議に服従せよと訓諭し、多年の宿志を一擲して國家の爲に其の身命を捧ぐべきことを要求したのである。一點曇りなき彼の皎々の心事は、實に亡兄彌太郎の精神を繼承して更に光彩陸離たるものがある。當時此の彌之助の布達を讀んだ社員達が、彼の高潔な心事に打たれて思はず落涙を禁じ得なかつた云ふが、彌之助及び其社員の胸中は推察するに難くないのである。

此の日(九月十五日)創立委員は政府に對し日本郵船社會創立規約を提出したのである。兩會社より日本郵船會社へ引續ぐべき海陸資産の代價は、三菱は岩崎家の所有物を除いて總資金を五百五十四萬三千四百十八圓と認め、其中五十四萬三千四百十八圓は新會社の負債とし、殘額五百萬圓を出資額と定めた。共同運輸は總資金を六百五十二萬六千三百四十圓と認め、其中五十二萬六千三百四十圓を新會社の負債とし、殘額六百萬圓を出資額と定めたのである。三菱に對しては日本郵船會社の五十圓株十萬株、共同運輸には同じく十二萬株(内五萬二千株は官有、六萬八千株

は民有)を所有する云ふ事を規定し、之に對して政府は會社開業の日より十五ヶ年間其利益が年八分に達せざる時は、政府が之を補給する事を約したのである。又負債に對しては年七分の利息を付し、之を五ヶ年より十ヶ年に償還するこゝも約した。茲に兩者合同の議が成立したのである。越えて同月二十九日には政府は日本郵船會社に對する命令書を發し、十月一日には日本郵船株式會社が正式に誕生したのである。三菱が海運業を閉止した時、其の所有汽船は二十九隻、小蒸汽船は十三隻、風帆船一隻、庫船六隻、舢舨下船及び小船は二百二十六隻、その總計は二百七十五隻を數へ、浮標も十二個を有した。尙ほ海陸の従業員は二千九百十七人を計上したのであつた。彌太郎が土佐開成商社を開いてより僅かに十五年、此の膨張振りは眞に刮目に價するもの云はねばならない。其の後の郵船會社に就ては本書に關係がないので省くが、三菱が會社の株を次第に手放し、現社長各務謙吉が乗込む前には僅かに三萬餘株を有するのみで、全く三菱の傍系事業の一として存在したに過ぎなかつたが、(各務就任の時、宮内省の持株三十五萬株を買收し、再び資本上でも三菱の直系事業となつてゐる)同社が世界一の實質を具備する會社として、眞に赫々たる盛名を全世界に謳はれてゐるのは、全く此の十五ヶ年間に於ける彌太郎彌之助の全靈を傾けた郵便汽船三菱會社の基礎工事の卓拔さに求めなければならない。郵船の飛躍的な發展は彼等の

築き上げた礎石の優秀さの爲であつた。彼の計畫を方針を努力が、後継者に依つて恙なく引き繼がれたに過ぎないのである。若し郵船會社が、此の十五ヶ年の建設を繼承せず新設されたものであつたならば、それは到底今日の郵船會社を形成することは出来なかつたであらう。今日日本の海運業が眞に世界に覇を稱へ得るのは、明治草創の時代に、よく東洋の航權を外國より奪取し、而も奮然として、進取獨往の意氣を以て新天地を開拓したからに外ならないのである。思をこゝに到す時、岩崎彌太郎彌之助の功業が、如何に比類なきものであるかを知る事が出来よう。全世界到る處の港に翻る郵船社旗を眺める時、國民は眞に此の偉大なる日本海運界の父に敬意を表さねばならないのである。

五

日本郵船會社が創立されるに、政府は其の初代社長として彌之助に就任を促したのであるが彼は固辭して之を承けなかつた。靜かに亡兄の遺言を守つて、其の財産を監理し岩崎家の爲に縦横の經綸を振はうと志したのである。そこで三菱からは代表として莊田平五郎、吉川泰次郎、内田耕作、近藤廉平、淺田正文等を推薦し、自らは新天地開拓の爲に暫くの間其の書齋にかくれた。越えて明治十九年三月、彼は再び其智謀を傾けて財界の表面に其の姿を現はしたのであつた。

彼の巨歩は、其の積極的經綸と共に、やがて鬱然として我が財界に輝き、今日の偉大なる三菱財閥を築き上げる礎石となつたのである。世間では彼を單なる守成の人物と云ふが、それは餘りにも表面的な見方と云はねばならない。三菱の大をなした所以は、實に此の彌之助の智謀と膽力に求めなければならぬのである。彼は創世の將帥として攻防共に卓拔せる人物であつた。稀世の英雄兒岩崎彌太郎の跡を繼いで聊かも遜色を示さなかつたことは彼の眞價を語るに充分である。筆者は海運事業を閉止した三菱が、如何にして今日の隆盛の基礎を築いたかを述べずには此の三菱創世物語を擱筆することが出来ない。

明治十九年三月二十九日、彌之助は新たに「三菱社」を創立し、郵船會社より再び莊田平五郎を呼び迎へて支配人に任命し、こゝに更生三菱の第一歩を踏み出したのであつた。

六

弊社海運ノ事業先般日本郵船ニ引譲リ候付而ハ、向後社名之儀單ニ三菱社ト相唱ヘ、高島炭坑並に長崎造船所等之事業支配仕候間爲念此段御届申上候。以上

明治十九年三月廿九日

京橋區靈岸町拾貳番地
三菱社長 岩崎彌之助

彌之助は右の如き届書々東京府に差出と共に、其の統轄する高島炭坑、吉岡鑛山、長崎造船所、第百十九國立銀行、千川水道會社等の殘業を死守して更生のスタートをきつた。其の外傍系事業として既述の東京海上保險（明治十二年開業）及び明治生命（明治十四年開業）を擁してゐた。然し何云つても海運事業を離れた三菱の規模は狭小云はねばならなかつた。日本郵船に行く前の莊田の月給が四百圓であつたのに、呼び迎えられた後の月給が僅かに百圓に過ぎなかつた。こゝでも此の間の消息を知る事が出来よう。海より陸への轉換は、全く三菱の事業に一轉機を劃したものであつた。

明治六年に買収した吉岡鑛山や十四年の高島炭坑は既に述べたが、更生三菱を記すには長崎造船所や、第百十九國立銀行の事を語らねばならない。讀者は既に長崎が三菱にまつて發祥の地ともみなさるべき地であることを知つてゐる筈である。彌太郎の事業が土佐藩の創設した開成館に由來し、開成館の長崎出張所が後藤象二郎の發企したものであることも既に述べたが、彌太郎が後藤の不始末を整理すべく長崎に赴いた頃には、幕府の手に依つて此の長崎造船局（當時は製鐵所と稱す）は建てられてゐた。此は文久元年三月の竣工で、維新の際にも放棄されず、明治四年四月には工部省の手に移つて長崎造船所と改稱された。此の造船所が三菱の手に移るようになつ

たのは明治十七年のこゝで、共同運輸の白熱戦の眞最中であつた。彌太郎は夙に海運業者として所有船が増加すれば、其の持船の中には老朽のものも生じ、修繕改造の爲に造船所の必要を感じてゐたのであるが、當時の長崎造船所は官業特有のルーズな營業振り、人材の缺如の爲に缺損續きの醜態を演じてゐたので、政府の慫慂に應じようとはしなかつた。而も共同運輸の戦に全力を擧げてゐる時であつたので、政府の慫慂には頗る敵本主義的な臭味があつたのである。一徹な彌太郎は此を拒否しようとしたのであるが、彌之助は兄に説いて逆に此を自家の掌中に納めた。然し最初の契約は貳拾五ヶ年間の貸渡營業であつて、三菱は其の引受けに際し二萬二千九百餘圓の保證公債を納入したのである。當時彌之助は綽々たる三菱の餘裕を示す爲に、併せて政府の奸佞なる意圖を看破して、逆に私恩をきせる爲に損を承知で引受けた云はれてゐるが、それは彌之助の心事を知らざるもの云はねばならない。たしかに三菱の餘裕を示す策戦もあつたが彼は造船業の將來を洞察して、寧ろ敵の策略を逆用すべきであるを考へたのである。彌之助の眼は薩長政府の眼前主義を利用して巧みに三菱發展の地盤を獲得したのである。それ故に彼は其の海運業を日本郵船に引繼いだ時にも、決して長崎造船所の權利を讓渡しようとはしなかつた。彼は却つて此を自家のものとして拂下げ、積極的に經營することに定めた。そこで明治二十年に

なる彌之助は次の如き願書を提出して完全に自己の支配下に屬せしめたのである。

「明治十七年以來拜借仕居候長崎造船所之儀ハ、専ラ外國船ノ修繕ニ依頼シテ維持シ來候處、近時上海、香港等ニ於テハ、同業者ノ競争益劇數相成候而已ナラズ、昨今魯領浦鹽斯德港ニ於テモ同國政府ハ大ニ船渠構造罷在候由、就而ハ是迄長崎造船所ニ於テ大ニ頼ミテ得意ト致居候魯國軍艦モ、追々同港ニテ其修繕ヲ辨ジ候事ニ可相成且又長崎造船所附屬之諸機械ハ頗ル舊様ノ物ニシテ、機械類日新之今日、改良ヲ加ヘズ此姿ニテ因循姑息歲月ヲ送居候テハ、三五年ヲ出ズシテ衰類維持ス可ラザルノ有様ニ立到ル可クト痛心之至ニ不勝候。就而ハ於弊社今日ヨリ機械ヲ改良シ鐵船ヲ新造シ、専ラ職工ノ熟練ヲ謀リ、内外之信用ヲ厚クシ、將來ノ隆盛ヲ企圖仕度候間右造船所ハ特別ノ御詮議ヲ以テ兼而御定メ之價格金四拾五萬九千圓ヲ五十ヶ年賦トシ、御拂下ゲ之恩典相蒙候様仕度、斯ク御採用被成下候上ハ、飽迄同處隆盛之基ヲ鞏固ナラシメ候様盡力可仕ル此段謹而奉願上候也。」云々。

此の拂下けを許可されたのが六月二十日で、翌二十一年十二月一日には三菱造船所を改稱されたのである。彌之助は管事山脇正勝を其所長に任命し、銳意陣容を整へて雄飛を期した。彼は決して自家の利益のみを計らず、眼を大局に注いで飽くまで國家的の見地から造船所を大成せしめ

ようを圖つたのである。東洋の航權を掌握する事が我國の發展にまつて最大の緊要事であつた。等しく、造船業の自立自營も國家の將來にまつて決して忽にすべき問題ではないと思つた。従つて利益があれば舉げて設備の改造及び機械の購入に費してしまつた。當時此の彌之助の積極的な經營振りに對し少なからず非難を浴びせるものもあつたが、彼は平然として造船所の大成に死力を盡した。國運の伸張と共に産業も發展し、其結果貨物や海外來往者の輸送の爲に船舶の必要が要求されることは火を見るよりも明かであつた。此時、技術に於ても、材料に於ても、設備に於ても明かに外國に一疇を輸する以上は、其の建造を海外に求めねばならないのである。彌之助は海國日本の眞面目を發揮せん欲せば、國內に於て艦船を建造しなければならぬを考へてゐた。彼が利益を舉げて造船所の大成に注いだのも當然であつた。然るに此の長崎造船所を語る人は殆んど盡く、明治二十九年の航海獎勵法及造船獎勵法に依つて政府の補助が出るやうになつてから漸く收支相償ふに至つた云ふのであるが、それは大きな間違を云はねばならない。念の爲に次に其の利益を掲げて世の妄を匡そう。(宿利氏著「莊田平五郎」参照)

年 度 別

利 益 金

明治十七年(七月—十二月)

四〇、五七六、二六〇

明治十八年(一月—十二月)	五一、〇六六、〇七〇
同 十九年(同)	六四、六九五、二四〇
同 二十年(同)	三五、六九九、六三〇
同 二十一年(同)	五二、五〇九、二五〇
同 二十二年(同)	五四、八七七、九七〇
同 二十三年(同)	六一、三二四、五二〇
同 二十四年(同)	五四、五三〇、〇〇〇
同 二十五年(同)	四九、〇〇〇、〇〇〇
同 二十六年(同)	六三、七八五、八四九
同 二十七年(一月—九月)	一五〇、五四一、〇四〇
同 二十八年(自前年十月—九月)	四七〇、四三九、七八二
同 二十九年(同)	四二三、七三八、一四九
同 三十年(同)	一二一、六八八、九〇七

右の通りで数字的には好成績とは云へないが、決して連年多大の損失をしてゐたのではない。

眞に赤字を出したのは明治三十一年のみで(常陸丸竣工の年)其時は二十一萬五千九百三十圓餘の損失を招いたのであつた。彌之助の志す所は目前の小利でなく、たゞ本邦造船界の世界的發展にあつたのである。利益金を盡く改革と發展の爲に費消したこゝが、世人をして連年の損失の如く錯覺せしめたに過ぎないのである。彌太郎の海運業に對する目的が世界航權の掌握にあつた如く、彌之助の造船業に對する希望はたゞ世界造船界の覇權獲得にあつたのである。何れも祖國の將來に其の發展を希求する赤誠の發露に外ならなかつた。

拮据十有餘年の日清戰役を経た後、三菱造船所は我國造船史上に一轉期を劃した巨船常陸丸(六千三百噸)の竣工を終り、(明治三十一年)我國の造船技術が聊かも英國に比して劣らぬこゝを立證したのである。而も彌之助は之を以て満足せず、日露戰爭後の國力の一大發展に乗じて益々其規模を擴大し、明治三十八年には神戸に、續いて下關市外の彦島に分工場を作り、明治四十年代に至つては全く東洋一の大造船所にしてしまつた。明治十七年七月七日、彌太郎が政府から貸與を受けた時は、社員が四十二人、職工は六百六十六人に過ぎなかつたのであるが、明治四十年代には工場面積十五萬五千餘坪、造船、造機及びタービン工場等、盡く最新式の機械を完備し、事務員約七百、職工八千、船渠三、船架一を數へ、船渠の最大なるものは長さ七百十四呎を有して

當時世界第一を誇る汽船ミネソタを容れて尙ほ百尺の餘裕を生ずるに云ふ状態であつた。従つて其造船能力も優秀を極め、我國に於ける造船事業の支配權を完全に掌握するに至つたのである。

大正年間の好況時代や海軍擴張の時代に、三菱造船の地位は隆々として盛大を加へ、長崎のみで二萬有餘の職工を使い、長崎市政の運命を左右する程の勢力を築き上げたことも周知の事である。今日は三菱航空機を合併して三菱重工業社となつてゐるが、彌之助の卓見も其の懸命の努力は眞に國民的感謝に値するものに云ふべきであらう。又同造船所中興の功臣として莊田平五郎の名も没することは出来ない。彼は明治三十年より明治三十四年の五ヶ年、眞に寢食を忘れて造船所の強化の爲に努力し、彌之助及び當時の社長岩崎久彌の期待に酬ゆることを忘れなかつた。

七

第一百九國立銀行は、既述の如く三菱が共同運輸の間に最後の一戦を傾けてゐる眞最中に引受けたものである。

同行は舊白杵藩士の共同出資に依つて創立されたものであつた。(資本金三十萬圓)當時舊島原藩士の發起で出來た第四百四十九國立銀行(資本金十三萬圓、函館に創立す)との共同出資で樂産商會なるものを組織し、同商會の荷爲替は第四百四十九國立銀行を経て第一百九國立銀行宛に取組

まれた。此の商會は北海道の物産を内地に輸送し、それを販賣する事を目的としてゐたのであるが始めの中は収益が頗る多かつたので、更に其の業務を擴張すべく、兩銀行の保證の下に金十五萬圓を三菱から借入れたのである。一時は非常に殷盛を極めたが明治十五年以降の不景氣の爲に破産するに至つた。こゝに於て保證した兩銀行も、維持に窮した結果、更ためて合併し新らしく第一百九國立銀行を設立してそれを三菱に譲渡したのである。(明治十八年五月二十八日)此の第一百九國立銀行は、後に三菱合資会社の銀行部となり(明治二十八年十月)日清、日露戦争以後の財界變動期にも活躍を演じ、大正八年に至つて現在の株式会社三菱銀行となつたのである。尤も三菱では明治十一年七月に「爲替法」を制定し、五百圓以下の現貨輸送を止めさせるに云ふような貨幣運輸上に新境地を開拓してゐたのであるが、彌之助は三菱の事業が著しく擴大するに共に資金の運用上から夙に銀行を其の掌中に收める必要を痛感してゐたのであつた。對共同運輸の一戦に早くも勝利を確信し、銀行業が將來の三菱にまつて、其の事業支配の確立上重大な役割を演ずることを看破してゐた。彌之助は同行を掌握するや、豪放を以て鳴る従兄弟豊川良平を頭取に就任せしめ、其の自由手腕に委せた。

豊川は人も知る如く彌太郎の母三輪子の甥で、夙に慶應義塾に學び、彌太郎の命を受けて三菱

商業學校を創立し（既述）人材養成の爲に努力をしてゐた。彌之助は大阪時代に重野成齊について共に漢學を修めたこと云ふ關係もあつた。彼は茫漠として大洋の如く、特に野武士的な豪放さを持つ人物である。當時は官尊民卑の風の甚だしかつた時で、日銀の普通銀行に對する態度は寧ろ壓制に近いものであつた。此の弊風を蹂躪し堂々己が主張を吐露し得る者は、全く豊川を指して他に求めることが出来なかつた。彌之助は此を知つて豊川に此地位を與へ、積極的な活動を行はせたのである。果せる哉、豊川は彌之助の期待に背かず縦横の手腕を振つた。殊に明治二十八年に同行が銀行部を改稱されてからは、彼の活動は素晴らしいものがあつた。日露戦争を挟んだ數年間なごは三菱銀行をして九天の高きに豪嘯せしめたもので、三菱銀行草創の基礎を固めたのは此の人の力に負ふ所が多い。彌之助は豊川の手腕を信じ、少しも容喙する所なく自由に其の敏腕を振はせたのである。此は彌之助の特徴の一つで、信頼した以上は少しも渝らぬ信實さを示した。豊川が三菱の外務大臣として、實業界は勿論のこと政界の裏面にも活躍して、三菱發展の上に大きな役割を演じたことは既に周知の事實である。彼の存在は三井の中上川と對照されることも人の知る通りである。筆者は筆のついでに、豊川と並照される功臣莊田平五郎のことを述べよう。茫漠として大洋の如き豊川に對し、莊田は尖銳針の如き人物であつた。豊川が三菱の外務大

臣として縦横に其の外交的手腕を發揮する時、莊田は透徹した頭腦を以て内政の任に當り、三菱百年の大計を樹立する事に腐心してゐた。莊田は豊後臼杵藩の出身で、慶應に學び、卒業後同校の教師をしてゐる時に豊川に知られ、其の推薦に依つて三菱に入社したのである。（明治八年）入社後の彼は常に内を守つて帷幄の大計に没頭し、彌太郎、彌之助、久彌の三代に歴任して其の補翼としての任を誤らなかつた。彌之助が國家的事業として損得を度外して引受けた長崎造船所に對し、彼はよく彌之助の意を體して、身一番々頭の地位にも拘はらず、進んで家族と共に長崎に赴き、之が經營の爲めに全力を傾倒した一事を以て、彼の至誠振りを知る事が出来よう。三菱の社規は勿論、一切の計畫に彼の透徹した頭腦が重大な役割を演じてゐたことは人の知る通りである。第百十九國立銀行を三菱に斡旋したのも彼であつた。

此の三菱銀行の發達につれて、同行の資本が金融資本として如何に儼然たる威力を示したか云ふことは、三菱財閥の發展を語る者にまつて見逃せぬ重要問題である。こゝにも彌之助の鋭い智略が躍如として我々の驚嘆を誘ふのである。

八

彌之助は明治二十年に川田、莊田の兩名に囑して東京倉庫會社を起させてゐる。其の直接の原

因は汽船事業廢止の結果深川の倉庫が不用になつた爲に創立させたのであるが、彌之助には倉庫業の將來性を洞察する明があつた。これが今日の三菱倉庫の前身で、同社は既に住友倉庫や三井の東神倉庫と共に其の廣大な羽翼を全國に擴げて、年々巨萬の貨物を吞吐してゐるのである。東京倉庫が、神戸が國港として經營施設される前に、和田棧橋、高濱繫船場等を築造して倉庫業を營んだが、此事は輸出入貨物に對する倉庫業の元祖として誇るべき事實である。又明治二十一年には末延道成や阿部泰藏等に依つて相互主義の火災保險會社（明治二十四年に設立された明治火災の前身）が企てられ、彌之助はこれにも大きな助力を惜しまなかつた。然し更生三菱にまつて最も異色あるものは山陽鐵道の創立に協力したこゝである。（明治十九年十二月創立）此の山陽鐵道は大阪の藤田組と三菱が中心となつて創立したのであるが、彌之助は陸上交通發展の必然性を看破して積極的に之に協力するこゝを惜しまなかつた。始めは兵庫縣知事内海忠海の懇懇に依つて動いたのであるが、彌之助は莊田平五郎を代表として之に應ずるこゝにした。愈々發起人がきまり、藤田傳三郎が創立委員長に就任するこゝ、莊田は中上川彦次郎を推輓して同社の社長としたのであつた。後年中上川が三井に轉じ大改革をなして其の名を日本財界に不朽のものたらしめたので、彼を以て純粹な三井育ちの如く思ふ人もあるが、此の山陽鐵道の社長時代までは彼も亦三

菱系の一人物であつた。彼は既述の明治十四年政變に際し福澤の甥であり、慶應義塾に關係の深いこゝ云ふ理由で外務省書記官を免ぜられたのであつた。其の後は慶應派の機關として發刊された時事新報に社長となり（明治十五年三月）編輯に會計に滲漚たる五ヶ年を送つてゐたのである。莊田が彼を推薦した時には、其の時事新報も基礎が固まり、彼は豫ての志望である實業界に方向轉換をしようとしてゐた。三菱は中上川の外に牛場卓藏も推薦し、専務として中上川を補佐せしめた。此人も十四年の政變に大隈門下であるこゝの理由により、統計院少書記官を免ぜられた人であつた。

中上川が社長として赴任したのは明治二十年の二月であつたが、其の快刀亂麻を斷つが如き才腕は至難なる創業事務を見事にやりこめてしまつた。二十一年十一月には兵庫・明石間十哩の運轉を開始し、同年末には之を姫路まで延長し、二十四年八月に會社を辭する迄には、神戸尾の道間百二十七哩の鐵道を殆んき完成しようとしてゐたのであつた。（白柳氏著「財界太平記」参照）中上川退社の原因は、關西の低級なる株主の非難の爲に、三井家改革の爲に出馬を懇懇されたのであつた。關西側の株主の中には中上川の積極的な經營方針が判らず、眼前の利益ばかり考へて中上川の社員優遇の方針をも失當の甚だしきものこ叫ぶものがあつた。此の關西實業家の利己主

義は、遂に我財界の劃期的大人物である中上川彦次郎を三菱陣營より取り逃してしまつたのである。中上川退社後の山陽鐵道は、財界の不況と共に經營困難となり發起人の中にさへ其株を賣つて關係を絶つものも生じて來た。然るに彌之助は頑として踏み止まつた。代表重役に命じて經營の刷新を計り、一層の後援を惜しまなかつた。その努力も報はれて、明治三十九年に西園寺内閣が鐵道國有を斷行した時には、山陽鐵道は立派な發展を遂げてゐたのである。此の一事が物語るように、彌之助は常に一旦關係した以上は、如何なる事情があつても決して中途で放棄したり、中止するようなことをせず、成果の上るまで頑張り通した。彼は人を信ずるに同時に自己を信ずる事も強い男であつた。

彌之助は山陽鐵道との間に此の如き深い關係を結ぶ一方更に遠く九州に手をのばした。先づ明治二十五年の創立に係る若松築港の應援に乗り出したのを手始めに、經營難に依つて救済を求めて來た筑豊鐵道を後援し、其の經營權を掌握してしまつた。此時仙石貢は鐵道局を辭し三菱より同社に派遣されたのであつた。續いて明治三十年には此會社が九州鐵道と合同し、仙石は其の社長として九州鐵道界の支配權を三菱の手に掌握したのである。此の九州鐵道界の覇權掌握は同地方に於ける石炭の輸送力を三菱の手中に握らせることになつた。それが如何に三井及び各富豪の

所有炭坑にまつて脅威であつたか云ふことは、今更茲に筆者が秃筆を走らすまでもあるまい。彌之助の陸上交通機關への着眼は國家の將來を按んずる彼の至誠の發露であるが、一面高島炭坑を中心とした彼の鑛山業に對する素晴らしい計畫の一つであつた云ふ事が出来る。

抑々三菱鑛業の發端は、明治六年に彌太郎が岡山縣の吉岡鑛山を買収した時に始まり、既述十四年の高島炭坑の買収、十七年の奥州小眞木鑛山の入手に依つて次第に膨脹して來たのである。然し鑛山や炭坑の經營が眞に三菱系事業の重要部門となつたのは彌之助の時代である。彼は瓜生震南部球兵の幕將を従へ、多くの鑛山や炭坑を買ひ入れたのであつた。殊に九州方面の山々には一木一草盡く彼等の血と汗が滲んでゐる云はれる位で、高島炭坑を始めとして、明治二十二年の新入炭坑、餘田炭坑、二十八年の上山田炭坑、三十三年の相知炭坑の買収や、三十五年に掘り當てた方城炭坑等は彌之助の功勞として没することが出来ない。此等の炭坑から掘出された石炭が如何に九州地方の發展に裨益したかも今更説明するには及ぶまい。此の九州の炭坑開發を見るに彌之助が懸命に九州地方の陸上交通の支配權掌握に盡力した反面の理由を發見する事が出来る。實に彼の智謀は底の知れざる深さを持つもの云はねばならない。

彌之助は上述の如く着々として陸の事業に手を擴けたのであるが、其の最も異彩を放つものは東京丸の内街の建設であつた。彼が此の我國財界の心臓部にも目される丸の内一帯を手に入れたのは、明治二十三年三月のこゝである。

當時政府は國運の發展に東洋の風雲の險しさを眺め、師團増設の必要を痛感してゐたのであつた。然るに政府には其の財源がないので、丸の内一帯に神田三崎町附近の土地を賣却して費用を捻出しようとした。當時の丸の内は一隅に兵舎があつた外には少數の腐朽の家屋に荒寥たる草原のみであつた。三崎町附近も練兵場として使用されてゐたので全く深閑とした凄み處であつた。こゝにかく、吳服橋、和田倉門、日比谷、數奇屋橋の廓内八萬餘坪を賣らうとしても、餘りの宏大量に一手に買ふ者がなかつた。此に於て政府は三井、三菱、大倉、澁澤等の財界巨頭連を召喚して入札を命じたが、何れも入札に應じようとはしなかつた。そこで時の大藏大臣松方正義は彌之助に直接交渉を試み、政府所要の金額を以て買取ることと要請した。彌之助は殆んゞ強制にも等しい交渉を受けて、ぢつと腕を組んで考へたのである。當時の三菱にまつては非常な大金であつたので、流石の彌之助も一寸躊躇せざるを得なかつた。然し彼は内外の狀勢を眺め、日本が非常に困難な時局に當面してゐることを思ふと、政府の深憂に同情を禁じ得なかつたのである。一片

皎々の義氣が彼の胸中を走るに、彼は國家の爲に喜んで其の要請に應じようと思腹を定めた。全く利害を超越した報國の誠意だけであつた。豪腹な彼は買入後の處置を後日の研究にまつことに心を定めた。彌之助が此の拂下交渉を受けた頃、莊田は英國にあつて此報を知り「買取らるべし」この電報を寄せたに云ふが、彌之助は緻密な莊田の性格を知るだけ、買入後の處置に對してかなり安心した氣持ちを持つこゝも出來てゐた。莊田の歸朝後、彌之助は幕僚共と協議の上、次の如き拂下願を政府に出したのである。

陸軍省御所轄地御拂下願

- 一、監軍部及工兵第一方面跡地
- 一、師團司令部跡地
- 一、近衛師團騎兵營跡地
- 一、永樂町近衛經理部跡地
- 一、歩兵第三聯隊跡地
- 一、錢瓶町砲兵第一方面倉庫跡地
- 一、有樂町練兵場地

一、神田三崎町練兵場地

此坪數合計十萬七千二十六坪五合九勺九才

右陸軍御所轄地、今般御賣却相成候趣傳承仕候、就而者、前廉書之地處悉皆金壹百貳拾八萬圓ヲ以テ私へ御拂下相成候様仕度、願意御聽許被下候上ハ、御差圖次第速ニ代金上納可仕候、此段相願候也。(宿利氏著『莊田平五郎』より)

これは明治二十三年三月五日のことで、翌日には許可されたので、こゝに荒寥たる丸の内街は三菱社のものになつたのである。此の拂下金は八回拂(前記宿利氏著参照)であつた云ふが何れにせよ三菱にまつては大きな犠牲であつた。當時彌之助が「此の草茫々の野原を何にするのか」を問はれて「藪でも作つて虎でも飼ふさ」を答へた云ふ話があるが、彼の豪放な性格を物語るものではないか。

今日此の三菱ヶ原が我國財界の心臓部として發達し、三菱の一大寶庫となつてゐるので、此を一種の不勞所得の如く罵り、機會ある毎に其の一部分でも國家又は東京市へ寄附せよ云ふ人があるが、當時報國の赤誠を以つて此を犠牲的に買受け、苦心慘愴の上、此を今日の盛大に導いた彼等の勞苦を思はねばならない。三井にせよ、大倉にせよ、又愛國事業家の標本の如く自負した

澁澤にせよ、盡く政府の要請に背を向けたのである。彌之助の皎々たる愛國の誠意を無視して、此の如き強請的言辭を弄する輩は眞に輕蔑すべき存在云はねばならない。

彌之助は此の宏大なる土地を如何にすべきかに就て熟議した結果、莊田の意見を用ひてオフィス街の建設を斷行したのである。此の年の秋、海軍省技師會彌達藏を招聘し、全地域面の實測ミ地質調査を行はせた。測量や設計圖の完了をまつて、愈々明治二十五年一月に所謂丸ノ内一號館の建築に着手したのである。此は二十七年六月三十日に竣工し(四階建ビルディング)三菱社は駿河臺より同所に移轉し、やがて其の貸室も満員になつた。續いて着手した二號館は二十九年の七月に竣工し、明治生命が移つてきた。翌二十九年二月には三號館が完成し日本郵船が移つた。此の三號館には地階より三階までエレベーターが設置されるなき、當時隨一の理想的ビルディングであつた。此の如く丸の内街が着々ミ建設されるようになるミ、各方面から三菱に借地を申込むものが續出して來た。かくて彌之助の果斷な處置は、年々共に三菱の繁榮を招來せしめるに至つたのである。後年三菱に地所部が設置されるや、此の三菱ヶ原は完全に所謂土一升金一升の土地ミ變化してしまつた。會彌の後任ミして就任した保岡勝也の時から、鐵筋コンクリート建築が續出し、其の次ぎの櫻井小太郎の時代に至つて、今日の輝かしき丸の内街を見るこゝが出来たので

ある。今日聳立する近代建築に依つて其の繁榮を謳歌される迄の三菱の苦心は、到底筆者の秃筆を以て語り得るものではない。我々はたゞ彼等の刻苦勉勵に敬意を表せずには居られないのである。それにしても私心なき彌之助の果斷が、此の如き繁榮招來の根底をなしたと云ふ事は、世の富豪達の注目を要する所である。荒寥十萬坪の草原を一轉して我國財界の心臓部たらしめた功績は、三菱の大いに自負してもよいものだ。彼等は妄狂の愚説に脅かされる必要は聊かもないのである。筆者は丸の内街を通る度に、彌之助の豪壯の心境を追想して常に感無量たるものがあるのだ。それは永久に輝く彌之助の壯舉と云はねばならないのである。

10

上來述べた如く彌之助は單なる守成の人物ではなかつた。彌太郎の建設した偉業を守るだけではなく、彼は縦横に其の才腕を驅使して今日の三菱財閥の基礎を完成せしめたのであつた。彼は又政治的手腕にも秀で、徒らに傲岸自ら高く持して他との協調を避けるが如きことを欲せず、宿敵澁澤も握手した位であつた。従つて長閑さの間にも從來の如く敵視し合ふ事もなかつた。彼は經濟的にも軍事的にも我國の死活を制する朝鮮半島の風雲を眺め、清國との間に何時大事の勃發するかも判らぬ情勢を看取して、先づ國內の充實を計らねばならぬと考へてゐた。それ故に彼

は徒らな國內鬭争を避けたのである。決して私利の爲に節を屈したのではなく、國富を増進して舉國一致外敵に備へねばならぬと考へてゐたのである。此の彼の愛國の精神は既に屢々述べてきたが、明治二十一年に海防費として政府に十萬圓を獻金したところでも判らう。彼は此の年從五位勳四等に叙せられ、明治二十三年には國會の開設と共に貴族院議員に列せられたのである。

明治二十六年十二月十五日、三菱社は商法の規定による合資會社組織となり、所謂三菱財閥の總司令部を確立したのである。此の年亡兄彌太郎の遺兒岩崎久彌が、多年の外國留學から引揚げて來たので、彌之助は潔く社長の椅子を退き、自ら後見役として帷幄のうちにかくれた。次いで日清戦役の終了後、彼は時の伊藤内閣の奏請に依つて男爵を賜つたのである。(六月九日)此時彼は熊本の旅宿にあつて恩命に接したのであるが、急遽留守宅に打電して授爵拜辭の意を宮内省に上申しめた。彼は自分の行つて來た事業が盡く報國の誠意に基づくものではあるが、これは實業家として否臣民として當然の義務を履行したに過ぎないと思つた。特に論行の恩賞を受けることは、彼の臣民としての良心が許さなかつた。久彌も亦父彌太郎の勳功に依つて男爵を授けられたが、彌之助の意見に共鳴したのであつた。事實、海坊主だとか、海上政府だとか罵られて亂臣賊子の如く扱はれた過去を思へば、寧ろ無冠の一實業家として邁往するこゝを欲したのである。

彌之助は卒然として旅より歸り、伊藤首相に面會して授爵拜辭の意志を述べた。然るに伊藤は頑として之を許さず、彌之助、久彌の兩名は茲に於て男爵の恩命を拜授するに至つたのである。多くの實業家達が、實業家としての使命と地位を忘失して、徒らに權門に怖媚し、或は華族に姻戚關係を結び、或は勅選を狙ひ、甚だしきに至つては買勳の醜態を演ずるなき、全く貧犬の如く勳章乞食の醜行をなすのミ對比して、彌之助の心事の高潔さは眞に推賞に値するものミ云はねばならない。

其の年の十一月二十九日、彌之助は政府の懇懇に應じて日本銀行總裁の地位に就いた。彼の前任は三菱創業時代の功臣川田小一郎で、常に大曲の邸宅に行員を呼びつけて諸事を決濟してゐたが、彌之助は毎日克明に出勤し、精勵恪勤を極めた。當時彼は人に語つて曰く、(財づる物語より)「日銀には定款や政府の定めた規定があるから、私は夫れによつて萬事取扱ふ方針である。人は代れぎ銀行は變らぬ。川田老人は豪傑だからあの流儀でやれたが、之を一般に適用するわけには行かない。私は豪傑でなくとも遣れるやうな習慣をつくつて置くのだ。」

ミ云つたが、彌之助らしい行き方である。事實、仕事を特異な天才的人物だけにやれるようにしておく時は、その人の死ミ共に其の仕事は亡びねばならない。人間が盡く同一の智ミ同一の性

格ミ型を持つてゐない以上は、仕事を特異人物だけにやれるようにしておくことは危険である。彌之助の周到なる注意は、常に此の如く至れり盡せりであつた。彼の三菱に於ける施政方針は即ちこれである。豪放果敢な一面に此の如き周到さを持つてこそが、彼をして守成人の代表的人物の如く思はせたのである。前述の社長引退の一事も此の堅實性を物語る一證ミ云ふべきであらう。彼が潔く久彌に其地位を譲つたことは、後年(大正五年)彌之助の嫡子小彌太が外遊から歸朝した時久彌が其地位を譲る原因をなしたとも云へるのである。彌之助がよく長幼の序を辨へて宗家を立てたことは、伯叔兩家の春風を永久に保持させる教訓に外ならなかつた。

彼は在任二年にして日本銀行總裁の地位を去つて、爾來財界の表面に立たず、久彌の帷幄の中にかくれて全三菱の指導を怠らなかつた。而して明治四十一年三月二十五日、顔面腐骨症を病んで遂に其の華々しい一生を終つたのである。

一一

彌之助の意圖は屢々述べ來つた如く、彌太郎の意志を繼承して、我が帝國の國威を世界に冠絶せしむべく、國富増進に死力を盡すことにあつた。彼は國富の増進なくして國家の繁榮を期待することは出來ないミ信じた。彌太郎にせよ、彌之助にせよ、三菱創立の意義を此においてゐた

のであつた。決して一家一門の繁榮の爲に執着したのではなかつたのである。現社長岩崎小彌太が、往年或る事業に就いて後援を懇願した一訪客に對し「三菱個人としてはこれ以上強い儲けようとは欲しないが、君の事業が國家を益する事か否か、先決の問題である。國家の爲めになる事であれば、私は何をおいても後援を惜しまぬ」と云つたが、實に三菱を貫くものは此の報國的信念に外ならないのである。彌太郎彌之助の信念は今も三菱財閥の根本に灼熱の如く燃えてゐるのである。

彌太郎の時代は眞に三菱の基礎を作り荆棘を切り開いて行く爲に、兵馬恠徳に叱咤する草創の將帥として、或は權謀と術策を弄した傾きもあつたが、それは前人未踏の新天地を開拓する者にとつて已むを得ない道であつた。彌太郎が如何に新興日本の世界的飛躍に死力を盡したか云ふことは既に本書の過半を費してそれを物語つた。然るに彌之助は此の賢兄の死力を盡して確立した基礎に立つて、よく守り、よく伸張發展せしめたのである。こゝに彌之助の出發點に於ける安易さがあつた。それは彼の天與の性格をより一層濃厚に見せた。彌之助の對世間的の風當りの弱さもそれが爲であつた。實に此の兄弟の足跡は我が産業史上に燦として輝く功業と云はねばならない。殊に創世三菱の特徴は、眞に主従一如苦樂を共にした點にある。社員は一旦緩急ある度に

社長と辛苦を共にし、社長は又其の勞に酬ゆることが極めて厚かつた。彌太郎臨終の遺誡にもある如く、主人は創業の社員の勞苦を察して之に永久の保證を與へようとしてゐた。此の異體同心に依る頑丈なる協力一致が創世三菱を飛躍的に發展せしめたのであつた。筆者は既に創業の功臣川田小一郎、石川七財を記し、引續いて豊川良平、莊田平五郎の二智囊を述べたが、それは幕將としての功勞を略記したに過ぎない。此の聰明豪快の二首領に對し、前記四智囊の協力が如何に三菱の進路を善導して誤らなかつたか云ふことを知るに同時に、此に従ふ全社員の至誠協力も亦決して首腦幕僚に劣るものではないことを牢記せねばならない。書き残した幕將の中に、三村君平があり、莊清次郎があり、近藤廉平、末延道成、桐島像一等もある。又現三菱最高幹部の人も共に創業の苦を嘗めた人々である。然し此等の功勞を一々擧ぐれば、それは本書一卷を以て終る事は出来ない。臣僚の功罪は盡く其の將帥の責めだ。彌太郎彌之助に依つて率ひられた三菱が、堂々明治大正の財界を疾驅し、三百年の傳統を誇る三井財閥と對抗し得る地位を築いたことは何人も否定し得ない事實である。我々はそこに眞の守成的智將岩崎久彌を眺め、豪放果敢の當主岩崎小彌太を仰ぎ見るこゝが出来来る。而も綺羅星の如く並ぶ智能の幕將、此等を語るには筆者は又稿を更めねばならないのである。今日財閥呪咀の愚説に乗つて、三菱を強盜財閥の巨魁の如

く痛罵する者もあるが、此の三菱の偉業を凝視する時、我等は却つて國民的感謝を注がねばならないことを知るのみである。三菱の富を三菱一個の富の如く認識することは誤れるも甚だしいものだ。三菱の富は即ち我が帝國の國富の一つだ。彼を撲滅し彼を掃蕩する時、日本は果して如何なる状態に當面せねばならぬのであるか。我々はそこに困苦と疲弊と衰退に呻吟する悲惨なる状態を推想し得るのみである。翻つて現三菱財閥に望まねばならぬことは、彼等が創世三菱の拮据經營を忘失せんとする傾きを反省することである。又彌太郎彌助の辛苦と、其の愛國的理想を認識する必要がある。御身等は財閥呪咀の矢面に立つて怯懦であつてはならない。堂々財閥の使命を掲げ、國力發展の爲に勇往邁進しなければならぬのだ。財閥は救世軍や慈善團體の眞似をする必要はない。今日の國防の重點が所謂經濟國防におかれてゐることは周知の問題である。今や將に日本の富力の徹底的増進の爲に眞に死力を盡すべき時である。同時に國恩を感じ、社會恩を感じ、以て奉公の至誠を完ふせねばならないのである。創世の將帥彌太郎彌助の最大劣處は、如何にして四恩報謝の實を擧ぐべきか云ふことを知らなかつた一事である。

此事は彌太郎彌助の兩人ばかりでなく、古往今來國家の重臣の中に一人をも、明達之士を擧げることは出来ないものである。それは同時に日本の持つ致命的な劣處といふ事が出来る。今日の

濁惡亂世の風潮は即ち此の聖教忘失の産物云はねばならない。彌太郎兄弟は創世の偉業確立の爲に、此に思を致し得なかつたのかも知れない。されば總數一萬を以て數ふる全三菱社員は、此の草創の英靈を慰藉すべく、團結して其の劣處を補はねばならないのである。それは字内隨一の正法を知るのたゞ一途あるのみだ。速かに正法を研究して、眞の盡忠報國の道に死力を盡さねばならないのである。

仰ぎ見る巨像の如き三菱財閥を眺め、茲に草創の物語りを執筆した理由の一は、彼等に眞の財閥の使命を自覺せしめることにあつた。卷末に當り、現三菱財閥首腦部の猛省を翹望して此の拙文を擱かう。

(完)

〔後記〕

本書は昨年七月下旬より稿を起し、連月雜誌『太陽』の執筆に追はれながらも續稿、漸く完結を見る事が出来た。全執筆所要日数は僅かに五十日、爲に文中多少の過誤も免れぬことと思ふ。其等は再版を以て訂正の豫定、御心附の點に附き御示教を仰ぎ得れば幸甚である。然し、其の内容に於ては世の彌太郎傳と趣きを異にし、眞に独自の境地を開拓したことを私に自負してゐるのである。

尙参考材料の蒐集及び校正等は、『太陽』編輯局同人の協力になることを附記しておく。

(了)

昭和十年三月七日印刷
昭和十年三月十二日發行

三菱創世物語
定價 金貳圓五拾錢

著者 藤本秀之助

發行者 東京市京橋區橫町一ノ一 田中英

東京市荒川區日暮里町二ノ六一

壹誠社印刷所

印刷者 黒須 澳治

不許
複製

發兌

東京市京橋區橫町一ノ一
振替東京四五八一八番

日本不二通信社

電話京橋50一〇八九番

日本不二通信社の使命

世相、日に非にして人心亦頗に悪化する。古來の學匠謬議によりて世道を誤り曲學に依りて正史を棄し而も國を擧げて邪法に叩頭するの結果、此の濁惡亂世の時相を生むに至れり。今や正道地に墮ち邪義獨り跳梁す。蓋し之を等閑にふさば邦家將に亡ぜんのみなり。知らずや大聖叱呼し玉ふ所の「正法治國、邪法亂國」の聖句を。

吾等現實の世相を省みて日夜憂苦し、愁惱日に新たなるものあり。今や大義名分は空語に化し、人倫の常道を亦能く説き得る者なし。軟弱亡國の宗教は此の弊風を助長して益々國民を混迷の極に彷徨せしむ。吾等此の危機を熟視して晏如たる能はず、「月刊太陽」を前衛として國家革新の大旗を掲ぐるに至れり。明達の高士切に微衷を擲んで偏に清援あらんことを。

- 一、主師親の三徳を説いて、人倫の大本を示す。
 - 一、國教の樹立を提唱して、亡國宗教の打倒を要求す。
 - 一、教育の根本的改革を叫び、併せて國史の改正を要求す。
 - 一、政治經濟並に社會萬般に對する破邪顯正をなして、人心の覺醒を促す。
 - 一、盡忠報國の眞意を説いて、人臣の道を誨ふ。
- 以上

本日不二通信社出版目錄

日蓮大聖人御書新集

佐藤慈豐編

皮製・美本・函
定價八拾五圓

立正安國論精釋

三谷素啓釋

皮製・美本・函
定價百拾貳圓

賊は尊氏一人か

藤本秀之助
井上五郎共著

發禁

安田善次郎評傳

藤本秀之助著

近刊
四六版・上
定價四拾貳圓

近世三井財閥論

藤本秀之助著

近刊
四六版・上
定價百貳拾五圓

675
226

106

